

町民文芸



只見短歌会

九月詠草

大塚栄一

指導

ナツメロの大正琴の慰問には口づさむ老の声も弾めり
馬場 八智

四季ごとに変はる裏山眺めつつ青葉あふるる櫛の里山
渡部ゆき子

保育所の休みに来し孫その度に大人の言葉覚へて話す
新国由紀子

見上ぐれば雲の流れも秋空にそよぎてやさしコスモスの花
関谷登美子

腕よりも脚よりも太きさつま芋掘りたる孫は喜び見せ来る
渡部ヨリ子

孫二人繕ふ我に寄り添ひてどの子が糸を通してくるや
目黒 富子

こぶし苑の慰問に来たる園児らのおゆうぎいくつも見ては涙す
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十月定例会

目黒十一

指導

散髪の鏡の中や菊日和
幸生

足止めて百舌鳥の高鳴き青い空
カメムシを追いかけて騒ぐ鄙の家
信

鬼やんま居間をコースと定めけり
似顔絵にホク口を入れる秋の蠅
味代子

姉の忌や銃後の日記秋しぐれ
道祖神傍らに野菊や夕まぐれ
弘子

手際よく芋煮作りて主婦の留守
パレードの旗秋空に触れるほど
一恵

嬌声や目と鼻先に熊の棚
よく見れば肩に威厳やへこき虫
恒夫

災害を思い返している厄日
月白し車窓に秋の風を入れ
礼

新走りこれが一番夫の喉
薪積んで腰を伸ばせば薄紅葉
一穂

秋の水鯉の尾ひれのひとひねり
水没の村の祭やしめやかに
修一

老体の若者しのぐ新走り
熊笹の中より秋の水の音
吉見